

RINGADAWN 〈リングアドン〉

虚戦士と終わりの鐘

あやめゆう

Yu Ayame

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくするには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵
挿画
地図

B
U
N
B
U
N
平面惑星

目次

序幕	夜	11
第一幕	虚戦士	23
第二幕	流離	47
第三幕	合流	67
幕間		81
第四幕	連鎖	91
第五幕	遁走	119
幕間		151
第六幕	不屈	155

第七幕	想	181
幕間		207
第八幕	穢	215
終幕	鐘	245
幕後	夜明け	259
あとがき		274

登場人物紹介

クロード



ミルナ



グラン





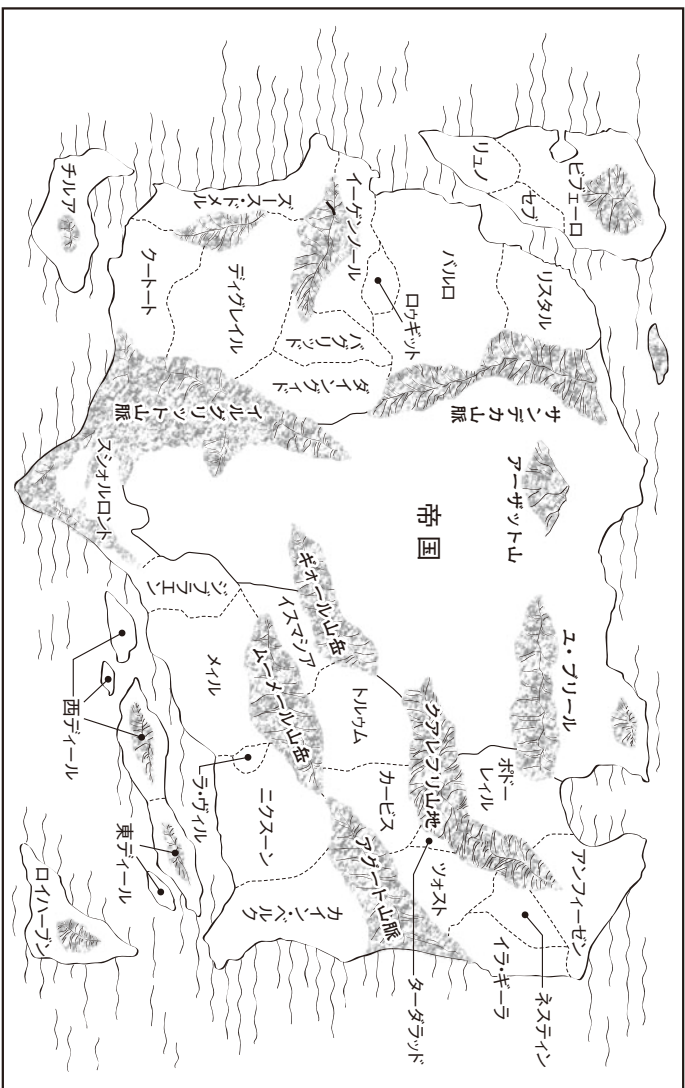
ユツユ

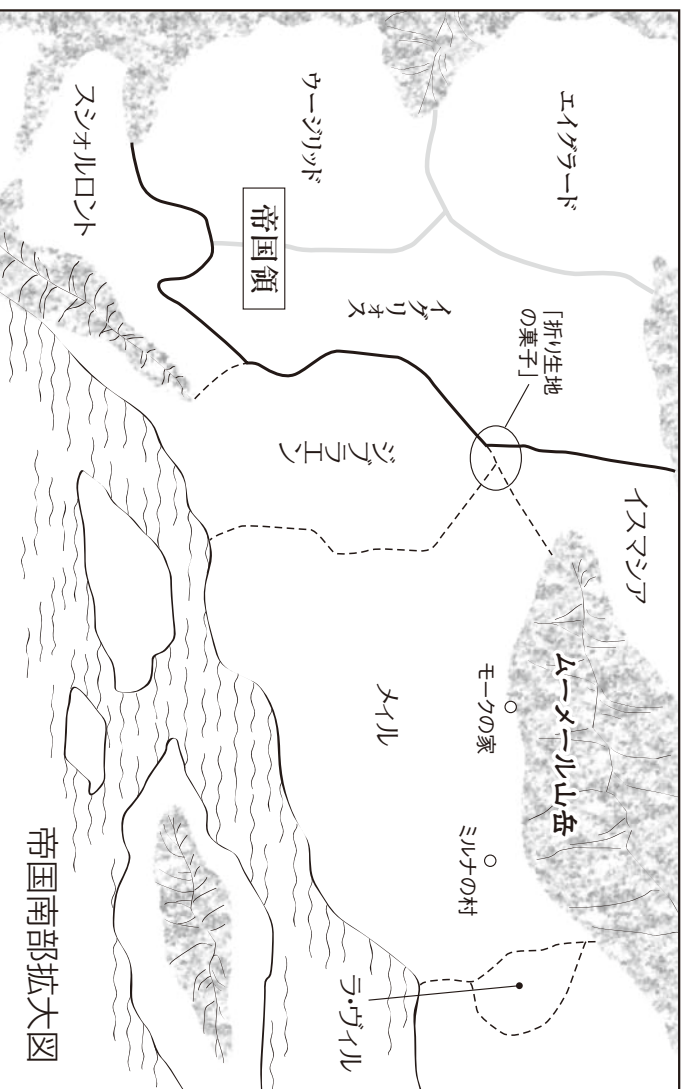


ツロ



モーグ





リンガダwn
RINGADAWN

虚戦士と終わりの鐘

序 幕
夜

NO ONE KNOWS HOW IT ALL STARTED.

魔法使いが言いました
終わりの鐘が響くまで

泣いてる子供が可哀想で
泣いてる貴方が可哀想で

手を差し伸べて助けたら
一緒にいてと言われたから
共に歩むと願いて
いつまでだって聞かれたから
魔法使いは言いました

終わりの鐘が響くまで

泣いてる子供が立ち上がり
泣いてた貴方と歩き始めて

もはや助けは要らないはず
だって涙は止まったから

けれど繋いだその手を離せず
別れの涙は訪れず
終わりの鐘は響かない

いつまでだって言われたから
ずっと一緒に答えたの

御伽の国の物語
終わりの鐘が響くまで



——鐘の音が、響いている。

昼と夕暮れ、御伽噺の時代から、獣避けとして鳴らされる号鐘^{ごうしょう}。城で打ち鳴らされた鐘に反応して城下の鐘楼が鳴らされ、それを受けてまた別の鐘が遠く近く、高く低く——響く輪唱。

男は物心付いた頃から、鐘の音が苦手だった。何故なら鐘というものは本来的には忌避^{きひ}の音であり、人里に迫る獣を近付けないために鳴らされていたからだ。人々は無意識に鐘の音を聞いて安心する。鐘の音が聞こえる範囲は安全なのだから。

けれど、彼は『魔^{けもの}』の側だった。

だから夕暮れの鐘が響いている間、彼は床に転がる死体と死体を眺めて眉根を寄せていた。

転がっている死体の数は、ひとつ、ふたつ、みつ……全部で十四。領主の死体、臣官の死体、女官の死体、護衛騎士の死体……。

彼は暗殺者だった。

物心付く前から、彼はこれのために訓練していたし、物心が付いた頃にはもう死体^{これ}をつくって生きていたのだ。どう考えても生還の見通しが立たない仕事もあったし、初めから捨て駒扱いされているような仕事もあった。それでも彼はひたすらに死体を積み重ねて生き延びてきた。

特に理由はない。

どうしても生き延びたいだけの理由も、どうしても殺したいという理由も、絶対に死にたくないという想いも、彼にはなかった。特に理由がないからこそ、彼は鐘の音を嫌うのだ。

ただそうあるだけの魔^{けもの}。

鐘の音は止んだ。手に持った剣を鞘^{さや}に収めることなく、彼はそのまま歩き出そうとして——ふと、視界の端に映る死体以外のモノに気付いた。

いつの間にそこにいたのか、貴族服の女が、領主の死体の脇に立っていた。

魂を抜かれたように、ぼんやりと——何をするでもなく、女はその場につつ立っていた。高級そうな貴族服を見るに、死体の中の誰かが夫なのかも知れなかったが、彼にはどうでもいいことだった。

女は生きているのか死んでいるのか、呼吸をしているのかしていないのか、まるで判然としない。

ヒトの抜け殻、という感じ。

女はしばらく呆然と虚空を眺めるようにしていたが、やがてぎしぎしと音がするようなきこちない動作で首を動かし、彼を見た。

光のない、濁った色の双眼が、魔を捉える。

魂を抜かれたような女の瞳と、暗殺者としての観察眼が、ほんの一瞬だけ交差する。けれどそれは、あらゆる伝達を欠いた虚しい接触だった。

彼は何も感じなかったし、おそらく彼女も——何も感じてなどいなかったのではないだろうか。

不意に、女が視線を逸らした。何かに気付いたふうに広間の入り口側へ視線を向けて——、

——ぞ、つ、という音がした。

女の眉間に矢が突き刺さっていた。

半瞬だけ遅れて彼も広間の入り口側を見る。というより、見るまでもなかった。そこには彼の仕事仲間が立っており、単発式の弓銃の弦を引き直して次の矢を番^{つが}えているところだった。

彼はまた視線を動かし、女を見る。床に倒れた女はぴくりとも動かない。死んでいるのだから当然だ。いや、そもそも眉間に矢が突き刺さる前だって死んでいなかったとは限らない。

「何をやってるんだ、おまえ」

仕事仲間が言った。詰問というふうではなく、単純な疑問だったようだ。そいつもまた彼と同じ魔^{けもの}であるから、普通の感性ではない。

「……いや、よく判らない」

と彼は言った。

本当によく判らなかったのだ。

自分は一体何をやっているのだろうか？



——鐘が鳴っている。

戦士が戦場で戦うように、傭兵が雇われて戦うように、彼は命じられるまま殺し続けていた。

物心付く前から身に染み込ませ、魂に刻み込んだのは人殺しの業^{わざ}だった。どうやら自分がクラウスロンという名の暗殺者であることを知ったのは、十代の半ば頃であり、二十を過ぎたときにはもう熟達^{じゅたつ}の暗殺者になっていた。

どんな任務からでも生還したし、どんな対象だろうが彼の手^てに掛かって死なないことはなかった。石造りの外壁を素手で登って窓を破り城主の首をへし折ってまた壁を降りたこともある、三十人ほどいる大会議室の貴族を一人で全員殺したことも、屋敷の出入り口を封鎖して火を放ったこともある。

二十六のあるとき、彼は名を与えられた。

識別上の個人名、帝国の慣習^{のつと}に則^{したが}ったでっち上

げの貴族名、そして家名であるクラウスロン。

クラウスロンとは、元は貴族の名だ。

そもそものは帝国が侵略戦争を始めた頃、近くの山賊集団の代表に爵位を与えて部下にしたのが始まりだという。初代皇帝に雇われた破落^{ならざるもの}戸が、代を重ねて純度を増していった。進化というよりは深化というべきか——当初はただの遊撃として雇われていたはずが、いつしか闇討ちや暗殺を専門に任せられ、クラウスロンは望まれるままに研鑽^{けんさん}を重ねた。

そしてそのうち、クラウスロンという集団は集団であることを許されなくなった。

危険すぎる、と当時の皇帝に判断されたのだ。

結果、クラウスロンという名前と名前のない殺人者が帝国の各地に散らばり、クラウスロンと繋^{つな}がる者たちもまた散り散りになった。そしてその名は『物騒』の代名詞として語り継がれている。

だが、本当に『物騒』なのは、クラウスロンに依頼をする側なのだ。

魔は放たれなければ牙を剥かない。

三十を数えたとき、彼はそのことについて考えるようになっていた。

それは彼に名前が与えられたせいもあつた。彼はもはや使われる側ではなく、使う側に回っていた。彼と同じような、名前のない若者へ指示を出し、あるときは名前のない誰かを率いて仕事をこなした。

何人も何人も、名前のない若者が死んだ。

そしてその何倍もの人間を殺した。何百倍、だろうか。彼はもう自分で殺した人間のことなどろくに覚えていなかった。彼が殺さなくともどうせ他の誰かが殺しただろうし、そうでなければ大きな戦が何度も起こつただろう。結果的にはもしかすると彼は殺した人間の何倍もの人間を救つていたのかも知れないが、彼にとってはどうでもいいことだった。

魂に刻み込んだ人殺しの業には、結局のところ何の意味もない。そう考えるようになって、彼は自分が『意味』を欲していることに気付いた。

例えば自分が死んだとすれば、おそらく別の誰かが彼と同じように人を殺し続けるだろう。身に染み付かせ、魂に刻み込んだその業で。

ずっと同じ、ずっと続く——無意味。

だからその日、彼は自分に命じる側の人間を皆殺しにしてみた。試しに、という程度の気分で。

それで何か変わるかと思つたが、別に何も変わらなかった。クラウスロンは散り散りになつてゐるから、彼がクラウスロンを裏切つたところで、別のクラウスロンには何の影響もなかつたのだ。

全くの無為だった。何処か遠くで、別の街で、名前を持たない別の自分がまた死体を積み重ねる。昼と夕暮れに響く鐘の音に怯えながら。

それから少しの間、彼は自分を狙ってくる名前のない若者を殺し続けることになつた。彼は淡々とクラウスロンの仲介者を探し、見つけて、そいつを殺した。それで終わりだった。

魔は、ただあつさりと野に放たれた。

そしてまた——鐘が響く。

夕暮れに響く鐘の音から逃げるように、彼は少しの荷物と手に馴染んだ剣を持ち、街道を歩いた。もちろん行く当てなどなかった。行きたい場所もなかったし、するべきことも彼にはなかった。

街を出ていくらしないうちに、街道の向こうから馬車でやって来る行商人がいた。そいつが自分とあまり歳の変わらないクラウスロンの男だと気付いたのは、顔を覚えていたからではなくその気配を覚えていたからだ。同じ魔は二オイで判る。

「聞いたぞ。身内を皆殺しにしたそうじゃないか」特に非難するふうでもなく、馬車の御者台から彼を見下ろしてそいつは言った。「お偉方は恐慌状態だ。おまえに殺されるんじゃないかと怯えてる。特に今までおまえと懇意にしてた連中がな」

「それは考えもしなかった」

と彼は言った。本音だった。別に彼は自分の境遇に不満や恨みがあつたわけではないのだ。

「だろうな。名前にも意味などなかった」

そう、ただの刃であるのなら、識別名など必要がない。無為に死ね、と名前のない若者に命じるだけの理由もない。自分たちはただの獣なのだ。

無為であることに耐えられない、ちっぽけな魔^{けもの}。

「……俺を殺しに来たのか？」

問いに、御者台の男は少し考えるような素振りを見せ、自分の腰に括り付けてある剣を、鞘ごと外して地面に放り投げた。

「おまえの剣を俺に寄越せ。おまえは俺が殺したつてことにしておく。俺は此方^{こちら}で生きるが、おまえは何処かで生きればいい」

「悪いな」

と彼は言つて、彼もまた腰の剣を鞘ごと外し、男に放り投げた。そして自分は地面に転がっている方の剣を拾い、腰に取り付ける。

いつかと同じ問いが浮かんだが、やはり気の利いた答えは思い付かなかった。



——鐘の音は、聞こえない。

それは彼が住んでいる場所の問題だった。近くに大きな街がないのだ。小さな村はあるが、鐘樓を建てる規模の村はかなり離れた位置にある。

帝国を離れた彼は、メイル王国の北——ムーメル山岳の麓で鍛冶仕事に従事していた。紆余曲折があつたような気はするが、結局の所、流されるままここに流れ、先代の鍛冶屋に半ば頼まれるような形で鍛冶屋を継ぐことになった。

別に嫌ではなかつたし、他にやりたいことも思い付かなかつた。鍛冶屋は儲かる仕事ではなかつたが、すぐ近くの山や平原や川には野生動物がいくらでもいたし、家の裏手で野菜を育てれば、もう食うに困る心配はほとんどなくなつた。

彼は優れた鍛冶屋ではなかつたが、強いて稚拙というほどでもなかつた。近くの村や、あるいは少し

離れた村の住人が、時折やって来ては金槌や包丁などを購入していった。

人の世というものは、需要と供給なのだ、と彼はもう若くない歳になつて初めて実感できた。必要と必要を必要と呼ぶのだ。そういう意味では、暗殺者は世の仕組みとはまるで正反対だ。誰かが誰かを排除しようという、必要が呼ぶ必要——それはまた別の不要を生むだろう。連鎖が続けばいずれ人間が一人残らずいなくなる。必要が呼ぶのは次の必要で、それはきつと、近くの村の人々が子を産み家族を増やすようなものだ。そうでなければ、人間はいずれ死に絶えるだろう。

——やはり、自分たちは無為だったのかも知れない。自分と同じだった名前のない若者たちも、やはりただの無為だったのかも知れない。

それをわずかにではあるが、彼は「悲しいことだ」と思うようになった。彼の優れているとは言えない鍛冶仕事は、しかし誰かの感謝を呼んだのだ。

折れた包丁を打ち直したとき、新しい手斧を作ったとき、客のほとんどは彼に感謝と喜びを示した。

ありがとう——と。

誰かを殺してそんなふうに言われたことは、一度もない。誰かを殺させてそんなふうに言ったこともなかった。だから感謝を受ける度、喜ばれる度に、彼は複雑な想いを抱えるようになった。けれどそれでいいのだ、とも思った。

誰かに感謝されて自分の胸が痛むのは当然だ。いずれ痛苦に苛まれて死ぬのなら、それがいい。

……そうして月日が流れ、彼の頭髮には白いものが混じり始めた。いつからか野生動物を足で追うこともなくなり、何度も鎚を振るってから立ち上がる時には腰を叩くようになった。

あるとき、近くの——といっても歩いて半日は掛かる——村の若者が何人か訪ねて来て、鐘を創ってくれと言った。村の人口が増えて、領主の家来が鐘楼を建てると命じたのだ、と。

彼は困惑しながら村人に説明した。自分がやっている鍛冶仕事は小さなもので、大きな鐘を創るにはもっと大きな炉や鑄造の設備が必要である。だからもっと別の、例えば城下に近い街の鍛冶屋に頼んだ方がよい。

けれども村人は頑として譲らなかった。我々はあなたにいつも仕事をしてもらっているし、城下の方に仕事を任せたいとは思わない。設備が必要であれば我々が協力するから、是非ともお願いしたい。あなたは村人ではないが、尊敬すべき隣人です。

——違う、と彼は言いたかった。しかしもちろん言えるはずもなかった。彼はただ、流されてこまで来たに過ぎないのだ。であれば、今回だけ流されないわけにはいかなかった。

彼は村の若者たちと協力し、二箇月ほどの時間を掛けて鍛冶場の横に鑄造施設を増築した。煉瓦はわざわざ遠い街から買って来たし、彼の家にはいつも誰かが寝泊まりしていた。

設備が整った後は、全てが順調——というわけにはいかなかった。そもそも彼は優れた鍛冶屋ではないから、人間ほどの大きさがある金属を鑄造するのも初めてのことだった。何度も何度も失敗し、鐘が完成するまでには半年以上も掛かった。

そして結局、鐘が鳴ることはなかった。

領主の政策により、ごく小規模な村の人間を集めて新たな街を創る、ということだった。新たな街に移住すれば衣食住の保証があった。作物の不作が死に直結することも、深刻な貧困に怯えることもなくなる。村人にそれを拒否する理由はなかった。

あなたも一緒に行かないか、と誘われたが、彼はそれを丁重に断った。

——ざまあみろ、と彼は彼自身に対して思った。

こういうこともあるのだ。こういうことも有り得るのが、人生というやつなのだ。何も城に忍び込んで三十人殺すばかりが人生ではない。名前も与えられず、ただ人を殺し続けるより、よほどいい。

魔^{けもの}が、わずかな間とはいえ人と寄り添っていられたのだ。自分には十分すぎる。

彼は完成した鐘を鑄造施設に仕舞い込み、また元の暮らしに戻った。仕事は以前より減ったが、それでも彼は特に困らなかった。独りで生きられなくなれば死ねばいいのだ、と単純に思ってたさえた。

だが——やはり人生というものには判らない。

その年の冬、彼はそれを実感することになった。

ひどく冷えたある朝、彼の家の前に、毛布に包まれた赤ん坊が置き去りにされていたのだ。

メイル王国は雪の降る地方ではないが、それでも冬の朝は肌が切れそうな気がするほど寒い。赤ん坊が凍死していないのは奇蹟^{きせき}のように思われた。

後からよく考えてみると、おそらく赤ん坊の親が彼の起床に合わせて赤ん坊を家の前に置いていったのだろう。もし彼がそのことにすぐ気付けば、やや老いたとはいえそれでも常人ならざる脚力で親を追いかけて赤ん坊を突き返すことができたはずだ。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。